

東南アジアの民俗・文化

トンキンの日本人娼館

—トンキン理事長官府第九号機密書簡をめぐって—

はじめに

二〇一四年、私はインドシナにおいて植民地政庁がどのようにに共産党を監視していたのかを知るため、フランスのエクスアンプロヴァンスにある国立海外文書館 (Archives nationales d'outre-mer: ANOM) で警察史料を調べていた。このとき偶然、日本人娼館に関する次の史料を見つけた。

【史料一】

一九〇七年三月一日

アンリ・セステイエ

バックニン省フランス理事官

トンキン理事長官殿へ

「アジア系外国人の居住調査」

一九〇七年一月二三日付、機密書簡郵便第九号返信、ハノイ

バックニン省に日本人男性がいないことをここに通知いたします。六名の日本国籍をもつ女性が、ダップカウ地区で娼館を営んでおり、警察の管轄下にあります。彼女たちは入省と同時に登記を行い、すでに数年を経ています。しかし、この状況を規定にもとづくものとするため、一九〇四年八月七日付けの政令に従い、より正確なものにするべく、彼女たちに再申請を行わせました。これをもって一九〇七年二月一九日に受領いたしました六二号書簡の要請にお答

え致します。ハイフォン市およびハノイ市の市民課から現在使用されている正式な登記簿を送って頂きました。これにより、それぞれの身元確認が円滑に進み、アジア系外国人の監視に関する要請を順守いたします。

鈴木伸二

初めてこの史料を目にしたときはただただ驚くだけだった。一九〇七年といえば明治四〇年にあたるわけで、そのような時代に日本人女性がインドシナで性売りに従事しているとは思ってもみなかったからである。また、女性たちが働いていた場所が地方のバックニン省であったことも驚きの一因だった。ダップカウといった地名も一度も耳にしたことがなかった。

明治以降に海外に向いて性売りに従事していた女性は「からゆきさん」として知られている。からゆきさんについては一九七〇年代に山崎朋子の『サンダカン八番娼館』（一九七二年）、森崎和江の『からゆきさん』（一九七六年）が発表されてから、日本で多数の研究が行われてきた。山崎や森崎よりも早く出版されたものでは、森克巳『人身売買・海外出稼ぎ女』（一九五九年、至文堂）や谷川健一の編集による一連の研究がある。一九七〇年代以降であれば、シベリアや中国北東部のからゆきさんについて新聞資料をもとにその実態を描いた倉橋正直の研究、被差別部落との関係について考察した大場昇の研究、従軍慰安婦との関連性を考察した山田盟子や金一勉の研究、日本の経済進出とからゆきさんの関わりについて考察した清水洋・平川均の研究、日本社会の中で

からゆきさんがどのように捉えられていたのかを考察した巖本新奈の研究など、枚挙にいとまがない^二。海外ではジェームズ・フランシス・ワレンが二〇〇三年に *Ah Ku and Karayuki-san: Prostitution in Singapore 1870-1940* を出版し、二〇一五年には『阿古とからゆきさん：シンガポールの買売春 1870-1940 年』として日本語に翻訳された^三。ワレンの研究はシンガポール政府の検視官記録を中心に、様々な植民地史料を用いてシンガポールの性産業の実態を明らかにしており、現在までに出版されたからゆきさん関連の研究では傑出したものとなっている。

このように、からゆきさんの研究は決して少なくはない。そのため、エクサンプロヴァンスで史料を見つけたとき、私は自らからゆきさんを調べるまでもなく、先行研究を探せばインドシナに関する論考も見つかるだろうと思った。ところが、これを見つけたことができなかったのである。そこで、二〇一八年に再びエクサンプロヴァンスの文書館で日本人娼館関連の史料を探した。だが、国立海外文書館で私が見つけることができた史料は、トンキン理事長官府の史料に分類されている ANOM/GI/AF/02115 や ANOM/GI/AF/02117 の二つのフォルダだけだった。この二つのフォルダはいずれも一九〇七年にトンキン理事長官府が発した第九号機密書簡に関連するものだった。そのため、以下で使用する史料は一九〇七年に理事長官府が取りまとめたものに限られる。歴史的な論考としては誠に心許ない史料の数ではあるが、インドシナについて先行研究が見出せない状況を鑑み本論を執筆することにした。

本論は第一章で第九号機密書簡が出された経緯を、第二章ではその機密書簡にもとづき集められた各地の報告からトンキンにおける日本人娼館の位置を特定する。さらに、警察や憲兵隊、フランス軍が理事長官府に送付した調査や出入国記録から、監視の対象になっていた娼館主人や手配人、娼館で働く日本人

女性を顧客とした商人について記述し、その後で日本人女性の具体的な氏名、出生年、出身地、入国経路などについてまとめる。第三章ではハノイやハイフォンといった都市部だけではなく、辺境ともいえる場所にまで日本人娼館が進出していたことを踏まえ、なぜそのような場所において娼館経営が成り立っていたのかを当時のトンキンの状況、とりわけ鉄道と軍隊に焦点を置いて考察する。トンキンの鉄道建設についてはすでにいくつかの研究があり、本論ではこうした研究に依拠した。一方、軍隊に関しては一九〇七年の軍編成に関する研究がなかったため、官報である「インドシナ一般年報」とフランス軍参謀部が一九三〇年に発行した「仏領インドシナ軍史」をもちいて駐留軍の編成や軍事活動を明らかにした^四。

ここで、あらかじめ本論の限界について述べておきたい。先述したように本論はフランス国立海外文書館で筆者がみつけた史料に依拠している。この史料はあくまでトンキンに在留している日本人の所在についての報告からなっており、当時のインドシナで性売買がどのような法的根拠をもっていたのか、日本人娼館の労働環境など娼館内部の実態はどのようなものだったのかに関しての記述は一切なかった。そのため、こうした問題については議論できない。さらに本論では、フランス本国の公娼制度や、インドシナ以外の地域との比較といった点についても言及できていない。こうした点については今後の課題となるだろう。

第一章 第九号機密書簡とインドシナの統治形態

「はじめに」で述べたように、本論では一九〇七年のトンキン理事長官府の史料にもとづき議論を行うが、ここではまず、第九号機密書簡が発令された経緯と、この指示を受けて調査を行った部局について整理したい。

【史料二】

回報

一九〇七年一月二三日

理事長官より理事官、軍管区司令官、ハノイ及びハイフォン市長へ
第九号、機密

あなたの管理区域に居住する日本人の人数を至急お知らせください。同時に、一九〇四年四月七日のアジア系外国人の居住申告に関する政令にもとづき、居住地で作成した申告書の写しを郵送してください。これらの申告書は機密文書として送付してください。

グオーロ

官房、行政官

パトゥリ

第九号機密書簡にはトンキン理事長官のグオーロ (Groen) と、理事長官府官房の三級行政官だったパトゥリ (Patty) の署名が入っている。一九〇七年度の「インドシナ一般年報」によると、官房は極秘業務も取り扱うことになっているので、パトゥリが実質的な業務担当者だったことになる。^五この書簡の興味深い点は、機密文書であったことである。なぜ、日本人の所在を把握することが機密扱いとして処理されたのだろうか。

実は一九〇七年という年は日本とインドシナの関係が極めて微妙な時期だった。日露戦争で日本が勝利すると、インドシナのベトナム人知識階級の中で、日本の援助を得てフランスと対抗しようという動きが生まれた。これを主導したのは皇族のクオン・デ (Quang De) を盟主に維新会を組織したファン・ボ

イ・チャウ (Pham Bôi Chau) だった。チャウは一九〇五年に日本に密航し、犬養毅らと会談した。この会談を機に維新会はインドシナからベトナム人を日本に留学させる東遊運動を開始し、その中には皇族のクオン・デも含まれていた。インドシナ当局が在日ベトナム人についての未確認情報入手したのは一九〇六年中頃だった。インドシナ総督府はこれ以降、再三にわたって在日フランス大使館に日本政府に対して調査を要請するよう督促した。^六こうした中で一九〇六年十一月にフランスは日本との外交的な交渉を開始した。この外交交渉は、清国領土およびそれと直接境界を接する地域における双方の主権や保護権を承認することを目的としていた。日本はフランスのインドシナのように清国領土と直接境界を接する地域を領有していなかったが、将来の中国政策を見据えて協議に応じた。一九〇六年から始まる交渉では、日本がインドシナに対するフランスの権利を承認する見返りに、日本のインドシナでの最恵国待遇をフランスが認める付属宣言書を作成することが協議されていた。^七トンキン理事長官府の一九〇七年一月二三日付け第九号機密書簡は、日本人と反仏ベトナム人運動家との関係を疑いつつ、外交交渉に水を差さずに、インドシナ在留日本人を監視するという政治的な意味合いをもっていたのである。^八

第九号機密書簡を受けて各地の警察や憲兵、軍人は居留する日本人の情報を集めた。その際、一九〇四年四月七日の政令で定められた居住申告書のフォーマットが使用された。この政令はインドシナ総督府の事務総長だったブローニ (Broni) が創案したもので、インドシナに居住する外国人が居住地の所管省庁で登記を行うことを定めたものだった。すべての外国人は、居住地に到着後、十五日以内に登記を行わなければならない。登記の際には、本人の氏名、父母の氏名、国籍、生年月日、本人が最後に滞在していた場所、職業、妻や子供など同伴者の情報を申告しなければならない。申告はサイゴン、フノンペン、

サンジャック(ブンタオ)、トゥーラン(ダナン)、ハノイ、ハイフォンの庁舎や、各省の理事官府、軍管区の司令部で行うこととされた^九。

後の議論をより明確にするため、ここでフランスによるインドシナの統治形態を整理しておきたい^{一〇}。一九〇七年当時、インドシナはコーチシナ、トンキン、アンナン、カンボジア、ラオスからなる連邦を構成していた。この連邦を統括するのがインドシナ総督府だった。一方、各邦はそれぞれ自治権を与えられていた。コーチシナはフランスの直轄植民地であり、コーチシナ知事(Lieutenant-gouverneur)のもと知事府が行政を担っていた。また、コーチシナはフランス本国の議会に一名の議員を送る権限を有していた。アンナンやカンボジア、ラオスでは王室が残され、フランス人の理事長官(Resident supérieur)がこれをサポートする体制がとられた。一方、トンキンは直轄植民地や保護国ではなく、保護領とされた。トンキンにおける行政部門のトップは理事長官で、そのもとに理事長官府が置かれた。一九〇七年当時、トンキンには二三の省が置かれ、省行政はインドシナ総督によって任命された理事(Resident)を長とする理事府によって担われていた。また、トンキンでは中国と国境を接する山岳地帯に三つの軍管区(カオバン、ラオカイ、ハザン)が設置され、軍人である軍管区司令官が管区全体を管理する体制が取られていた。第九号機密書簡の宛先に軍管区司令官が含まれていたのはこのためであった。さらに、トンキンにはハノイとハイフォンという二つの市(Ville)が含まれていた。行政組織としての市は独自に議会を持ち、省よりも自治権をもっていた。また、本論に深く関わる組織としては警察にも言及しておかなければならないだろう。インドシナの治安維持組織は警察と憲兵、軍から成っていた。トンキンではハノイ市とハイフォン市がそれぞれ警察を組織していた。一方、これ以外の省では陸軍省に属する憲兵が警察の役割を担っていた。また、後に

みるようにハイフォン市では出入国審査は警察、入国後の外国人の監視は憲兵隊というように役割分担もあった。さらに、山岳地帯の軍管区では現地に駐留している軍人が外国人の監視を行っていた。第二章では国立海外文書館の史料を引用することになるが、それぞれの文書が警察や憲兵、軍人によって作成されているのは、上記のような理由からである。

第二章 トンキンの日本人娼館

二一 トンキンにおける日本人娼館所在地

第九号機密書簡はトンキンに居留している日本人の調査を地方行政機関に依頼したもので、けっして日本人娼館やそこで働く女性の調査を依頼したものではない。実際、国立海外文書館史料の出入国記録などには商業目的でトンキンに入国した人々の情報も含まれていた。だが、一九〇七年の史料でもっとも多かったのは、日本人娼館に関わる人々に関するものだった。表一はこうした史料の中から日本人娼館に関連するものを抜き出して作成したものである。表一の五番トゥーラン、トゥオンと六番のバックニン、

表1 1907年の日本人娼館の所在地

		現在の所在地
ハノイ市		現在の所在地
1 キュイーブ通り	rue du Cuivre	Hàng Mã 通り
2 タース通り	rue des Tasses	Bát Sứ、Hàng Đông 通り
3 ハイフォン市	Haiphong	
4 キエンアン省	Kien-an	
バックザン省	Bac-giang	
5 フーラントゥオン	Phu-lang-thuong	
バックニン省	Bac-ninh	
6 バックニン	Bac-ninh	
7 ダップカウ	Dap-cau	
8 ランソン省	Lang-son	
9 ラオカイ軍管区	Lao-kay	
10 イェンバイ省	Yen-bay	

(出所) ANOM/GGI/AF/02115、ANOM/GGI/AF/02117 より筆者作成

八番のランソン省は一九〇七年の段階で娼館は確認できなかったものの、それ以前に娼館が存在したか、その存在を示唆する記述があった史料にもとづいて付け加えた。以下にそれを示す史料二つを記載する。

【史料三】

フーラントゥオン、一九〇七年一月二八日
 バックザン省理事官
 トンキン理事長官殿

一九〇七年一月二六日作成、「第九号機密書簡返信、国境の日本人居住者に関して」

第九号機密書簡への返信としてバックザン省に日本人が居住していないことお知らせいたします。フーラントゥオンには昨年の十一月まで日本人の娼館がございましたが、現在、そこにいた女性たちは（軍の）駐屯地の中心であるバックニンに転居いたしました。

【史料四】

国家憲兵隊、ハノイ管区ダップカウ出張所

一九〇七年一月二日作成、「一九〇六年十二月の外国人監視報告」

一九〇六年十二月四日キンザプロウ

一九〇六年九月二七日にダップカウに到着し、一九〇六年十二月四日にランソンに向けて出発しました。ランソンから一九〇六年十二月十二日にダップカウに戻ってきました。一九〇六年十二月十四日にダップカウを出発してハノイに向かいました。おそらく、ハノイのキュイープ通り (rue du Cuivre) にある日本人娼館に行ったのだと思われます。日本製の絹織物と□□□□（判読でき

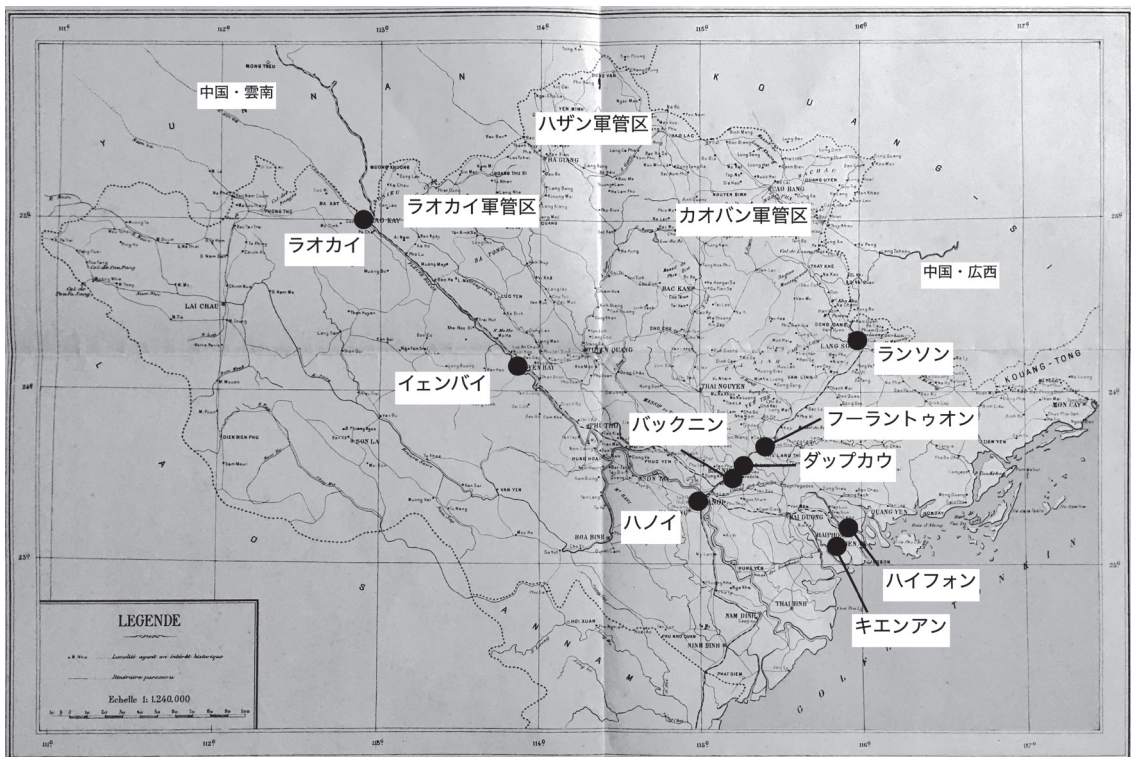


図1 トンキンの日本人娼館所在地
 1928年、インドシナ地理部作成24万分の1地図より筆者作成

ず)の商人で、普段の客は□□□(判読できず)とトンキンの日本人娼館で働く日本人女性です。これ以上の報告はありません。

史料三には一九〇六年十一月までバックザン省の省都フーラントウオンに日本人が経営する娼館があったこと、一九〇七年にはそこで働いていた女性たちがフランス軍の駐屯地となっていたバックニンに移動したことが明記されていた。史料四ではキンザプロウという商人が娼館で働く日本人女性を顧客として日本製の絹織物を販売していること、また、その彼がランソンに向かったことが記載されている。おそらく彼はランソンの娼館に商いのため出向いたのだと思われる。また、キンザプロウはハノイのキューイブ通りの日本人娼館に向かったと記載されている。キューイブ通りは現在のハンマー(Hang Ma)通りにあたる^{二二}。

娼館の所在地を示した図一をみると、トンキンの各地に日本人が経営する娼館があったことがわかる。また、その広がりには基本的に鉄道網に沿っており、ランソンやラオカイなどの国境地帯にまで及んでいた。

二二二 日本人娼館の主人、手配人

国立海外文書館の史料から判明した娼館主人や手配人は七名となる。以下ではまず、その史料を紹介する。

【史料五】ハイフォンからの報告

ハイフォン市警察

一九〇七年三月十一日、「一九〇七年三月期における日本人の出入国記録」

一九〇七年三月二日出港

ワタナベ・タロウ

三八歳、娼館主人、ジロンド号に乗船してトゥーランに出航

フギエ

十九歳、ジロンド号に乗船してトゥーランに出航

史料五はワタナベ・タロウという娼館主人がフギエという十九歳の女性を伴ってハイフォンからトゥーラン(現在のダナン)に向けて出港したと記録している。ワタナベなる人物がどこで娼館を営んでいたのかは記録されていないために不明であるが、トゥーランはアンナン最大の港町であるだけでなく、フランス海軍の軍港でもあったのでおそらくここにも日本人娼館が置かれていたのだろう。

【史料六】キエンアン省からの報告書

キエンアン省・理事官

一九〇七年二月十八日作成、「省内に居住する日本人」

一月二三日付第九号書簡に返信することを光栄に思います。本省には男性、女性、子供からなる六名の日本人が居住していることをお知らせいたします。一九〇四年四月七日の政令にもとづいて作成した調書の写しを同封いたします。

フルヤ・シンゾウ

一八五三年生まれ、娼館主人、ナガサキ出身

フルヤ・ムラ

一八五四年生まれ、女性

フルヤ・シンジ

一八九八年生まれ、男性

オナカ・フシモト

一八八三年生まれ、女性、ナガサキ出身、ハノイ・タース通 (Pre des Tases) 十五番から転居

オミヤ・タサカ

一八八四年生まれ、女性、バカン出身、ハノイ・タース通り十五番から転居
オアイ・オクムラ

一八八三年生まれ、女性、ハノイ・タース通り十五番から転居

キエンアン省は現在、ハイフォン市の行政区で空軍の飛行場が置かれている。史料六によると、ここで長崎出身のフルヤ・シンゾウが娼館を経営していた。調査にはフルヤ姓のムラとシンジが記載されているが、ムラはシンゾウの妻で、シンジは二人の子供だった。どうやらシンゾウは家族でキエンアン省に居住し、娼館を営んでいたようである。この娼館で働く三名の日本人女性は調査によるとハノイ市のタース通り十五番から転居していた。タース通りは現在のバス通り (Bat Su) やハンドン通り (Hang Dong) に当たる。この界限は仏領期、ハノイ市の娼館街であった。^{二三}

【史料七】ハイフォン市からの報告書一

国家憲兵隊ハイフォン連隊

一九〇七年一月二日作成、「一九〇六年十二月期の外国人監視報告」

エギ

ラオカイの娼館主人、一九〇六年十二月六日にハノイからハイフォンに到着。十二月二〇日にラオカイに向けて出発。

【史料八】ラオカイからの報告

ラオカイ第四軍管区、大隊隊長

一九〇六年三月十日作成、「第四軍管区報告」

氏名 ミヤケ・マサゾウ

父 ヘイザブロ 母 ナミ

国籍 日本

出生地 フクハラ、コウベ

出生年 一八六四年

職業 娼館の主人

妻 オカネ

【史料九】ハイフォン市からの報告書二

国家憲兵隊ハイフォン連隊

一九〇七年二月一日作成、「一九〇七年一月期の外国人監視報告」

カワハラ・ソウタロウ

ラオカイの娼館主人、一九〇七年一月二八日に日本から香港を経由してハイ

フォンに到着。一月三二日にラオカイに向けて出発。

ヨシダ・キチマツ

ダツプカウの娼館主人、一九〇七年一月二九日に勝利丸に乗船して日本から

ハイフォンに到着。一月三二日にダツプカウに向けて出発

コバヤシ

一九〇七年一月二九日に勝利丸に乗船して日本からハイフォンに到着。タカ
ナシ娼館に滞在。

史料七、八、九からラオカイ軍管区ではエギ、ミヤケ・マサゾウ、カワハラ・ソウタロウの三名が娼館を営んでいたことがわかる。史料七のエギは一九〇六年十二月六日にハノイからハイフォンに入り、二〇日にラオカイへ移動している。おそらく、ハイフォンに入港した日本人女性をラオカイに連れて行くためにハイフォンにやってきたのだろう。残念ながら一九〇六年の出入国記録がないために、誰を連れて行ったのかは同定できないが、次節でみるように一九〇七年の出入国記録には多くの若い日本人女性が記載されていた。

史料八はラオカイ軍管区で一九〇六年三月十日作成された調査となる。この調査は一九〇四年四月七日の政令で定められた居住申告書のフォーマットに基づいて作成されていた。おそらく、第九号機密書簡を受けて、前年度に作成した調査を理事長官府に送付したのだろう。ミヤケ・マサゾウは一八六四年に神戸の歓楽街である福原で生まれた。当時四三歳だった。調査を見る限り、妻のオカネも娼館の経営に関わっていたのだろう。史料六のフルヤ・シンゾウも家族で娼館を経営していたことをふまえると、当時、こうした経営形態は珍しくなかったのかもしれない。また、この史料八にはミヤケの娼館で働いていた十七人の日本人女性の居住申告書も付いていた。この十七名の日本人女性については次節で述べることにする。

史料九のカワハラ・ソウタロウは一九〇七年一月二八日に香港からハイフォンに入港していた。その三日後にはラオカイに向かっている。ハイフォン市警察による出入国記録をみると、同じ日にクボ・ヒザブロウ（四九歳）という男性、スミ（三八歳）、オキト（二〇歳）、オカサ（二二歳）という女性たちが香港から同じ船に乗ってハイフォンに入港していた。おそらくソウタロウも彼ら／彼女らと同じ船に乗ってハイフォンに入港したのだろう（表三）。史料九にはバックニン省のダップカウで娼館を営んでいたヨシダ・キチマツという人物

も記録されていた。ヨシダは日本から「勝利丸」という船に乗って一月二九日にハイフォンへ入港していた。彼もカワハラ同様に、到着するとすぐにダップカウに向かっている。

最後のコバヤシについては、二月二六日にトンキン理事長官府官房からハノイ中央警察署に「タカナシ娼館に滞在していた日本人のコバヤシが（ハノイに）向かったとハイフォン憲兵隊から連絡が入りました。この人物に関する情報をすべて入手し、彼の行動を逐一報告してください」と機密扱いの指令書が出されている。これに対してハノイ中央警察署は「ハイフォン憲兵隊から連絡を受けた日本人コバヤシに関して、二六日付け第四号書簡に返答することを光栄に思います。彼は一九〇六年十二月二九日に女性二人を伴ってトンキンに来たことが記録されています。一月一日にハノイに着き、十一番娼館に滞在しました。その後、ハイフォンに向けて出発し、同地ではタカナシ娼館に滞在しました。彼は定職をもっておらず、仕事は娼館で働く女性の手配です」と返信している。これらの史料を見る限り、ハイフォンにタカナシという名前の娼館があったこと、ハノイにも十一番娼館という名前の娼館があったこと、また、当時のトンキンには娼館で働く日本人女性の手配人がいたことがわかる。

以上の五つの史料から明らかになったことは、日本人娼館の主人や手配人がトンキン内を頻繁に行き来しているということだった。特に、ハイフォンは主人や手配人が移動する起点となっていた。これはハイフォンが海外航路船の寄港する港町だったからであり、娼館で働く女性たちはこの港から主人や手配人に伴われトンキン各地に移動したのだろう。この点に関しては次節でより詳しく見てみたい。



図2 日本人女性の絵葉書(1907年2月15日消印)
「125. トンキン、ハノイ・日本人女性」とある。
版元はハノイのジュルフィス (P. Dieulefils)



図3 日本人女性の絵葉書 (1908年4月消印)
「トンキン 日本人女性」とある。版元はハ
ノイのモロー商会 (R. Moreau et Cie)



図4 日本人女性の絵葉書(1911年4月26日消印)
「トンキン 日本人」とある。版元はハイフ
ォンのジュフレンヌ (P. Dufresne)



図5 日本人女性の絵葉書(1911年9月25日消印)
「225B トンキンに住む日本人女性」とある。
版元はハノイのジュルフィス (P. Dieulefils)



図6 日本人女性の絵葉書 (消印不明)
「トンキン 日本人女性」とある。版元はハ
ノイのモロー商会 (R. Moreau et Cie)



図7 日本人女性の絵葉書 (消印不明)
「148 ハイフオン 日本人」とある。版元は
ハノイのパシニャ (M. Passignat)

二一三 娼館で働く日本人女性

トンキンの娼館で働いていた日本人女性は全部で二九名だった。これはあくまで文書館に保管されていた史料から集計した数であって、おそらくもっと多くの女性がいたはずである。一九〇〇年代にはインドシナで日本人女性を撮影した絵葉書が数多く販売されるようになった。トンキンでもハノイやハイフォンで撮影された日本人女性の絵葉書が販売されていた。こうした写真のモデルとなった女性はおそらく娼館で働いていたのだろう。図二から図七はそうした絵葉書の一部であるが、消印や通信欄に書かれた日付を見ると、図二は一九〇七年二月十五日、図三は一九〇八年四月、図四は一九一一年四月二十六日、図五は一九一一年九月二十五日となっている。図六と図七は消印が消えていて読み取ることができなかった。これらの絵葉書を発行していた版元はハノイにあったジュールフィス (P. Dieulefitis) やモロー商会 (R. Moreau et Cie)、パシニャ (M. Passignat)、ハイフォンのジュフレンヌ (P. Dufresne) だった。版元の一つだったジュールフィスは一八八五年に砲兵連隊の下士官としてトンキンに派遣され、一八八八年にハノイで写真館を開業した。彼はインドシナの各地で写真撮影を行い、一八八九年のパリ万博ではインドシナの各地で写真展示している。一八九〇年代から一九一〇年ごろにかけて、自ら撮影した写真を絵葉書として販売したが、その数はおよそ五千種に上った。日本人女性を被写体として撮影し、絵葉書として販売するようになったのは一九〇〇年前後のことだと思われるが、こうした絵葉書が発行されるほどトンキンでは日本人娼館が認知されていたのだろう。

さて、史料で確認できた二九名の女性のうち、調書にもとづいて氏名が判明するのは二三人だった。史料一のバクニン省理事官が一九〇七年三月一日に理事長官府に送付した報告書にはダップカウ地区で六名の日本人女性が娼館で働

いているとあるが、彼女たちの調書は存在していない。そこで、氏名のわかる女性二三名を表二にまとめた。

表中の一番から十七番の女性はラオカイで娼館を営んでいた史料八のミヤケ・マサゾウと共に申告を行っていた。マサゾウと日本人女性十八名の申告書は筆跡がすべて同じであり、ラオカイ軍管区の大隊長が聞き取りをもとに作成したものだ。そのため、正確な発音で記載されているとは言えない。たとえば、十五番から十七番の三名の最終所在地をみると、Phumamotoと記載されている。これは熊本だと思われる。また、八番のオヨタの父親の名前などはまったくわからない。フランス人が居住申告書を書いているという点では十八番から二三番も同様であった。しかし、ラオカイの申告書は全体的に読み辛く、アルファベットから日本語を想像するのが困難なものも多い。これは軍人が聞き取りを行ったためかもしれない。

そこで表二は申告書に記載されている情報をそのままアルファベットで記載した。ただし、日本人女性の出生地に関しては音読から推定できる出身地を日本語で表記しておいた。表二の十八、十九、二〇番の三名は史料六のフルヤ・シンゾウがキエンアン省で経営していた娼館で働いていた女性たちである。二一、二二、二三番の三名はANOM/GI/AF/02117のフォルダの中に保管されていた申告書にもとづいているが、彼女たちが誰の娼館で働いていたのかはわからない。

申告書のフォーマットは概ね一九〇四年の政令にもとづいていたが、すべてが同じというわけではなかった。ラオカイやイエンバイの申告書は一人につき一枚だったが、キエンアンの申告書はフルヤ・シンゾウとその家族、娼館で働く女性の情報が一枚の申告書にまとめられていた。また、記載されている情報もラオカイやキエンアンには同地に入る前の最終所在地が記載されていた。一

表2 1907年の調査に現れた娼館で働く日本人女性

番号	名	姓	父親の名	母親の名	出生地	出生地	生年	入国年	入省年	最終所在地	娼館の場所
1	O-Tora	Kimoula	—	—	Nagasaki	長崎	—	—	—	Nagasaki	ヲオカイ
2	O-Chiyono	Ohiva	Makutarou	O-Chiye	Thimabara	島原	1887	—	—	Nagasaki	ヲオカイ
3	O-sayo	Harada	Sadaji	O-choise	Amakusa	天草	1883	—	—	Kumamoto	ヲオカイ
4	O-chiva	Sirahara	Bansaku	O-waki	Shimabara	島原	1882	—	—	Nagasaki	ヲオカイ
5	O-sei	Sakae	Kakuichi	Osaya	Amakusa	天草	1888	—	—	Kumamoto	ヲオカイ
6	O-Hana	Jawa-saki	Thomegy	Omaki	Mamuto	熊本?	—	—	—	Haiphong	ヲオカイ
7	Ohno	Masumoto	Tokuei	Osako	Nagasaki	長崎	—	—	—	Shaugai	ヲオカイ
8	O-yo-ka	—	Mikoge Malakuo	Fui	Ma-kusa, Komamoto	天草?、熊本	—	—	—	□ imago	ヲオカイ
9	Okama	Modiyama	—	Oyei	Simabara	島原	1887	—	—	Nagasaki	ヲオカイ
10	Omito	Yanagouchi	死亡	Ochika	Foukoudomimara	不明	1887	—	—	Sargha	ヲオカイ
11	Okumi	Thiba	Mineso	Okaiou	Mikho-mihagata	不明	1888	—	—	Sisuoka	ヲオカイ
12	Oyone	Mimodi	Masakitchi	死亡	Tsouma	不明	1887	—	—	Cho-oho	ヲオカイ
13	Okasa	Chirasuka	死亡	死亡	Boungo	豊後	1883	—	—	Ohita	ヲオカイ
14	Onoi	Fusiyaki	Cheitato	Oyoki	Yavatamachi	不明	1884	—	—	Nagasaki	ヲオカイ
15	Sigheno	Nagasima	Phumesakou	Asaghiku	amakousa	天草	1887	—	—	Phumamoto	ヲオカイ
16	O-Tei	Sasaki	Bounatsu	Oyouchi	amakousa	天草	1891	—	—	Phumamoto	ヲオカイ
17	O-Chiku	Yamada	Koachi	Ohaka	amakousa	天草	1884	—	—	Phumamoto	ヲオカイ
18	Onaka	Fusimots	Tsuo	Oraka	Nagasaki	長崎	1883	—	—	Rue des Tasses, Hanoi	キエツアン
19	Omiya	Tosaka	Massaki	Some	Ba-Kan	馬関 (下関)?	1884	—	—	Rue des Tasses, Hanoi	キエツアン
20	Oai	Occumoula	Giro	Tossi	—	—	1883	—	—	Rue des Tasses, Hanoi	キエツアン
21	Okiwa	Morita	Jinlok	Omatau	Oyra	大分	1882	1901	1904	—	イエソバ
22	O-Ha-Ro	—	—	—	Coumanoto	熊本	1878	1901	1906	—	イエソバ
23	O-Tsu-Yeu	—	Minoske	Oyoxa	Kagoshima	鹿児島	—	1907	1907	—	イエソバ

(出所) ANOM/GCI/AF/02115、ANOM/GCI/AF/02117より筆者作成

方、イエンバイの申告書には最終所在地の記載はなく、代わりにトンキンに
入国した年度とイエンバイに入省した年度がそれぞれ記載されていた。

表二にまとめた二三名の女性の年齢は二九歳から十六歳で、平均年齢は二二
歳だった。十番オミト、十一番オクミ、十二番オヨネ、十四番オノイの出生地
はアルファベットからではどこのかわからなかった。また、二〇番オアイの
申告書には出生地に関する記述はなかった。さらに六番オハナの Mamio は
熊本、八番オヨカの Ma-kusa Kumamoto は天草、十九番オミヤの Ba-kan は馬
関（下関）ではないかと推測した。これら八名を除いた十五名の出生地をみる
と、天草が五名ともっとも多く、ついで島原、長崎がそれぞれ三名、大分（豊
後も含め）二名、熊本と鹿児島がそれぞれ一名であり、すべて九州出身だっ
た。

次に、ラオカイ軍管区やキエンアン省、イエンバイ省に来る前の所在地をみ
ると、天草出身の五名はすべて熊本と記載されていた。また、島原出身の三名
は長崎となっていた。また、出生地が不明の十番オミトと十一番オクミは最終
所在地として Sargha、Sisuka と記載されていた。Sargha は駿河、Sisuka は
静岡であるのかもしれない。最終所在地が日本でなかった女性もいる。ラオカ
イにいた六番オハナはハイフォンだった。七番オイノは Shaugai とあり、上海
だったのかもしれない。この二人の申告書には注記が記載されていた。六番オ
ハナはジャンヌ商会 (Commerce chez M. Jeannou) で働いていたと注記があ
り、七番オイノは一九〇四年九月二七日にハノイで居住申請を行なっていると
あった。さらに、キエンアン省の十八番オナカ、十九番オミヤ、二〇番オアイ
は同省に居住する前にハノイの娼館街、タース通りにいた。トンキンへの入国
年度が分かるのは、イエンバイにいた二一番オキワ、二二番オハロ、二三番オ
ソユの三名だけだった。二三番のオソユは一九〇七年にトンキンに入国し、同

年のうちにイエンバイに来ていた。一方、二一番オキワは一九〇一年にトンキ
ンに入国し、一九〇四年にイエンバイ省の入省していた。二三番のオハロは一
九〇一年に入国し、一九〇六年からイエンバイに居住していた。この二人の申
告書からすでに一九〇一年には、日本人女性が娼館で働くためにトンキンにい
たことがわかる。最終所在地が日本以外であったのは二三名中七名だった（八
番オヨカ、十二番オヨネはアルファベットでは所在地を同定することができな
かった）。前節では、史料五のフギエがハイフォンからトゥーランに移動した
ことや、手配人のコバヤシが二人の女性を伴ってハノイに来ていた記録（ハノ
イ中央警察署による報告）、史料三でフーラントウオンの娼館が閉鎖され、女
性たちがバックニンに移動したことをふまえると、当時、トンキン内の娼館で
女性の行き来がかなりあったのだと推察できる。

次に、娼館で働く女性がどのようなルートでトンキンに入国したのかを考え
てみたい。表三はハイフォン市警察による日本人出入国記録（一九〇七年度）
をもとに作成した。

一九〇七年一月から八月にかけてハイフォンに入港、もしくはハイフォンか
ら出港した日本人女性は十七人であった。表三には女性と同じ船でハイフォン
に入国した男性も含めている。これは女性だけでなく、娼館主人や手配人
なども同行していた可能性があるためである。また、四月一日に入国した三名
のうち、二人が同じ苗字（カネハラ）だった。年齢的に親子であった可能性も
否定できないが表三に含めた。

この表からわかることは、ほとんどの女性が二〇歳前後であることだった。
彼女たちすべてが娼館で働いていたとは断言できないが、おそらくその多くが
トンキンでの性売りに従事したのだと考えられる。また、入港者の出発地、出
港者の目的地はいずれも香港だった。先述した娼館主人や手配人も香港からハ

イフオンに来ていたことを考えると、当時、香港―ハイフオン―トンキン各地を結ぶネットワークが形成されていたと考えて間違いないだろう。

表3 ハイフオン出入国記録(1907年1月～8月)

出入国年月日	氏名	年齢	性別	出航地・目的地
1907年1月17日	Tanaka Kin	19	女	入国 香港
1907年1月28日	Huizaburo Kubo	49	男	出国 香港
	Sumi	38	男	出国 香港
	Okito	20	女	出国 香港
	Okassan	21	女	出国 香港
1907年2月6日	Kawabara	32	男	出国 香港
	Ohama	22	女	出国 香港
	Amao	34	女	出国 香港
1907年3月27日	Saiki Tomi	28	女	出国 香港
	Tanaki Yoneko	18	女	出国 香港
	Mitsue Sawa	22	女	出国 香港
	Kawasaki Fusa	18	女	出国 香港
1907年4月1日	Kanehara Oshima	17	女	入国 香港
	Ulakawa Hide	22	女	入国 香港
	Kanehara Otame	49	女	入国 香港
1907年4月4日	Shibta Maritato	26	男	入国 香港
	Ona Shima	20	女	入国 香港
1907年8月2日	Toda	20	女	入国 香港
	Hama	23	女	入国 香港
	Yachuima	21	女	入国 香港
1907年8月4日	Otaki	21	女	入国 香港

(出所) ANOM/GGI/AF/02117 のハイフオン市警察日本人入国記録より筆者作成

第三章 鉄道、軍隊、娼館

図一でみたように、トンキンの日本人娼館は海の玄関であるハイフオンから、首都のハノイ、さらには中国と国境を接する山岳地帯にまで広がっていた。この広がりにはトンキンの鉄道路線に沿って分布していた。前章でみたよう

に、娼館主人や手配人はこの鉄道を利用して頻繁に行き来していた。しかし、娼館が経営を成り立たせるためには、それを利用する男性が必要となる。港湾都市であるハイフオンや首都であるハノイは人口も多く娼館が置かれる条件が整っていた。だが、バックニン省のダップカウは省都でもない地方の小さな町であるし、ラオカイは山岳地帯の辺境とも言える場所だった。なぜ、こうした場所で娼館が作られたのだろうか。

理事長官府史料の居住申告書でトンキンへの入国年度が分かるのは三名だった。表二の二一番のオキワと二二番オハロは一九〇一年、二三番のオツユは一九〇七年にトンキンへ入国していた。オキワとオハロが共に一九〇一年に入国していることを踏まえると、一九〇〇年前後にはトンキンで日本人娼館が営まれていたと考えられる。この時期のトンキンは開発の時代でもあった。開発を主導したのは一八九七年にインドシナ総督として赴任したポール・ドゥメールだった。彼は独善的とも評価される政治手法でインドシナ財政の立て直しを行い、ハノイの都市整備、鉄道建設を強力に推進した。また、トンキンの開発を妨げる要因となっていた山岳地帯の治安維持に力を注いだ。

ポール・ドゥメールは一八五七年にパリ・オルレアン鉄道の労働者の子供として生まれ、メダル職人の工房で働きながら国立工芸院を卒業した後、数学教授、ジャーナリスト、市議会議員を経て一八八八年に下院議員として政界入りを果たし、一八九五年には弱冠三十八歳で財務大臣に任命された異色の政治家だった。一八九五年にインドシナ総督のアルマン・ルソーがフーラントウオンからランソンに敷かれた鉄道の拡張を本国議会に要請した際、これをバックアップして議会の合意を取り付けたもの当時財務大臣だったドゥメールだった^{二三}。ルソーの後任としてインドシナ総督に着任したドゥメールは、インドシナに到着するや財政改革に乗り出した。ドゥメールが赴任するまで、インドシナ

の財政は連邦を構成する各邦ごとに独立しており、総督府には独自予算がなかった。そこで彼はアヘンや塩、酒を専売制にして間接税を徴収する税制改革を行い、これを総督府財源とした。間接税の導入により、インドシナの財政は一気に黒字化された。ドゥメールはこの間接税収入を原資として本国から巨額の借款を引き出すことに成功した。^{一四}その額は財務大臣として彼が認めた八〇〇〇万フランと合わせて、二億八〇〇〇万フランに達した。

この潤沢な資本を用いてドゥメールは様々なインフラ整備を行ったが、その中でもとりわけ、鉄道建設とハノイの都市開発は急ピッチで進められた。二一番オキワや二番オハロがトンキンに入国した一九〇一年のハノイは、サイゴンからの首都機能の移転や翌年に予定されていたハノイ博覧会に向け、会場の整備、官舎や道路、水道、河岸工事、ホテル、フランス人居住区、駅舎、鉄道の橋、線路の建設が急ピッチで進められている時期だった。^{一五}ハノイにはこうした建設現場で働く男性労働者が大量に流入しており日本人娼館はこうした都市開発景気の中で営業していた。

その後、開発の最前線は鉄道建設と共にトンキンの山岳地帯に移動していく。この山岳地帯には反仏武装集団や盗賊が潜伏しており、開発の大きな妨げになっていた。植民地当局は山岳地帯に軍を展開し、これらを掃討していった。一九〇〇年代の山岳地帯は鉄道建設と掃討作戦が同時に進行する開発と紛争の最前線だった。そこで以下ではトンキンにおける鉄道建設と山岳地方の治安維持活動を詳らかにし、日本人娼館の地方への進出を考察する。

三 一 トンキンにおける鉄道建設

一九〇七年、トンキンにはハノイ—ドンダン路線、ハイフォン—ハノイ路線、ハノイ—ラオカイ路線の三つの鉄道路線があった。このうち、もともと早

く路線建設が行われたのはハノイ—ドンダン路線だった。当初、この路線はバックザン省のフーラントウオンからランソンまでの区間しかなかった。フーラントウオンと後述するダップカウはハイフォン港と河川でつながっており、トンキン北東部に展開するフランス軍の軍事物資の集積地となっていた。^{一六}一八八七年、アンナン及びトンキンの総督だったポール・ベール (Paul Bert) は円滑な軍事物資の運搬を担う鉄道の建設を目的とした調査委員会を設置した。その後、ドウ・ラッサン総督 (de Lanessan) によってドウコービル社の六〇〇ミリ軌間鉄道が採用されることになり、一八九一年にフーラントウオンから北に向かって路線の建設が始まった。この路線は、一八九四年にランソンにまで達した。^{一七}一八九五年に総督として着任したアルマン・ルスー (Armand Rossau) はこの路線の経営改善を目的に、軌間を一メートルに変更して輸送力を強化させる方針を定めた。また、路線そのものも拡張することとした。路線拡張はランソンから中国国境のドンダンまでの区間と、フーラントウオンからハノイまでの区間であり、これによってハノイから中国広西省にいたる路線が作られることになった。ルスーは路線拡張が本国議会で承認された後、ハノイで病死した。そのため、一八九九年から始まり一九〇二年に終わる路線拡張工事は後任のドゥメールが引き継いだ。

ハノイ—ドンダン路線以上にドゥメールが力を注いだものがトンキンと中国雲南を結ぶ鉄道の建設だった。当時、トンキン経済を牽引していたリヨン・シロジケートは雲南の鉱山資源 (錫など) に注目していた。^{一八}ドゥメールはこれらの要請に応えつつ、フランスの中国における権益を拡大させる事業として雲南からハノイ、ハイフォンをつなぐ鉄道 (滇越鉄道) の建設を目論んだ。彼は本国の議会や巨大銀行と交渉を重ね、一八九八年十二月に二億フランの借款を獲得した。

ハイフォンーハノイ路線はドゥメールの鉄道建設プロジェクトの第一段階として一九〇一年に建設が開始され一九〇二年に完成した。この路線の開通によつて、今まで河川輸送に頼っていたハイフォンーハノイ間の流通は大きく改善されることになった。また、ハノイーラオカイ間の線路建設も一九〇一年から始められた。一九〇四年にはハノイからイエンバイまでの線路が完成し、一九〇六年には中国国境のラオカイにまで達した^{一九}。一方、ラオカイから雲南に向けての建設が始まったのは一九〇三年からだ。この区間の建設は困難を極めた。中国側で鉄道建設反対運動が勃発しただけではなく、過酷な気候・労働条件から病人や死者が続出したからである。トンキンでは劣悪な労働環境の悪評がたち、ベトナム人労働者を確保することは困難となった。一九〇四年から一九〇五年にかけては、ようやく中国の天津で労働者を六〇〇〇〇人確保したものの、そのうち四〇〇〇〇人が日射病で死亡し、生き残った労働者も逃亡するという惨状だった。工事が再開したのは一九〇六年であり、それは中国に駐留するフランス人外交官やレイノー商館の協力を得て、新たに三、四万人の中国人労働者を獲得できたからだ^{二〇}。この新規労働者の獲得によつて、ようやくラオカイから先の中国領内で工事が本格化した。

前章の理事長官府史料をみると、鉄道建設と娼館の分布に強い関係性を見出すことができる。例えば、史料三では一九〇六年にフーラントウオンの日本人娼館が閉鎖され、女性たちがバックニンに移ったとあった。これは後述するよるに、ハノイードンダン路線が開通したことで軍事物資輸送の始発駅だったフーラントウオンの役割が低下し、軍の拠点がバックニンに移ったことと連動していたと思われる。また、表二の二一番オキワは一九〇四年に、二二番のオハロは一九〇六年にイエンバイの娼館で働くようになっていた。一九〇四年にハノイーイエンバイ間の路線が開通したことで日本人娼館がイエンバイに進出

しただろう。さらに理事長官府の史料では、史料七の娼館主人エギ、史料八の娼館主人ミヤケ・マサゾウとそのもとで働く十七名の女性、史料九の娼館主人カワハラ・ソウタロウなどラオカイ軍管区のものもつとも多かった。ミヤケ・マサゾウと十七名の日本人女性に関する居住申告書は一九〇六年に作成されていたが、一九〇四年の居住申告書に関する政令では申請者は居住後十五日以内に所轄の行政府（ラオカイの場合は軍管区司令部）で申告することが定められていたので、彼の娼館はこの年に経営を開始したのだと考えられる。そして、この年はハノイーラオカイ路線が開通し、ラオカイー雲南路線の工事が本格的に再開された年でもあった。鉄道建設の進捗にともなつて日本人娼館が地方に広がっていったことが窺える。

三二 トンキンのフランス軍

トンキンの日本人娼館は同地における鉄道建設と深く関わっていたが、軍隊もまた娼館の分布と大きく関わっていた。ここでは主にバックニン省の小さな町でしかなかったダップカウト、中国国境に位置するラオカイで娼館が営まれていた事実から軍隊と娼館について考えたい。前節ではラオカイの娼館と鉄道の関係について論じたが、ここはラオカイ軍管区の司令部が置かれた町でもあった。当然、娼館の顧客には軍人も含まれていただろう。また、ダップカウトに関しては、史料一で六名の日本人女性が娼館で働いていたこと、また、史料四ではキンザプロウという行商人が日本人女性相手に絹織物を販売していたこと、史料九ではヨシダ・キチマツが娼館を営んでいたことなどが報告されており、一九〇七年に日本人娼館があったことは間違いない。

一九〇七年度の「インドシナ一般年報」からインドシナに駐留していたフランス陸軍を整理したものが表四となる^{二二}。インドシナにおける陸軍の配置は大き

表4 1907年のインドシナ軍

インドシナ 軍総司令部 統合参謀本部		
		インドシナ砲兵隊参謀本部 アンナン・トンキン砲兵部 第6混成中隊 トンキン現地人工兵中隊 サイゴン砲兵部 サイゴン臨時部 第7混成中隊 サイゴン現地人工兵中隊
植民地第4砲兵連隊		
		参謀本部 ハノイ 第1砲兵隊 ハノイ 第2砲兵隊 ハノイ 第3砲兵隊 フエ 第4砲兵隊 ランソン 第5砲兵隊 ダップカウ 第6砲兵隊 ダップカウ 第7砲兵隊 ハイフォン 第8砲兵隊 ホンガイ 第9砲兵隊 ハノイ 第10砲兵隊 ハノイ
植民地第5砲兵連隊		
		参謀本部 サイゴン 第1砲兵隊 サイゴン 第2砲兵隊 サイゴン 第3砲兵隊 サイゴン 第4砲兵隊 サイゴン
第1師団		
	第1旅団 ハノイ	第9植民地歩兵連隊 ハノイ 第1トンキン狙撃兵連隊 ハノイ 第4トンキン狙撃兵連隊 ナムディン 第1外国人歩行連隊
	第2旅団 バックニン	第10植民地歩兵連隊 第2トンキン狙撃兵連隊 第3トンキン狙撃兵連隊
第2師団		
	第3旅団	サイゴン (ブントウ)
	第4旅団	第11植民地歩兵連隊 第1アンナン狙撃兵連隊
	カンボジア狙撃兵連隊	第12植民地歩兵連隊 第2アンナン狙撃兵連隊
中国占領区駐屯部隊		
		第18植民地歩兵連隊 第5トンキン狙撃兵連隊
国境狙撃兵大隊 インドシナ騎兵隊 ハノイ兵器廠 インドシナ憲兵隊 軍法部		
第3軍管区師団 司令部 (ランソン)		
	カオバン管区	第3トンキン狙撃兵連隊 第3大隊 (タイグエン) 第2トンキン狙撃兵連隊 第4大隊 (ドンダン) 第5外国人大隊
		第3トンキン狙撃兵連隊 第4大隊 第2トンキン狙撃兵連隊 第5大隊 第5外国人大隊 第17中隊 第19中隊
第4軍管区師団 司令部 (ラオカイ)		
	ハザン管区	第2外国人連隊 第3歩行大隊
	バオラック	第4トンキン狙撃兵連隊 第3外国人大隊 第12中隊
		第2トンキン狙撃兵連隊 第5大隊
インドシナ 軍務局		
	アンナン・トンキン軍務部	ハイフォン軍務課 ダップカウ軍務課 ランソン軍務課 ラオカイ軍務課 フエ軍務課
	サイゴン軍務部	

(出所) Annuaire général de l'Indochine française 1907: p15-30 より筆者作成

くトンキンとコーチシナに分かれていた。コーチシナには第二師団と第五砲兵連隊が駐屯していた。一方、トンキンにはインドシナ軍の総司令部が置かれ、第一師団と第三軍管区師団、第四軍管区師団の三師団と第四砲兵連隊が置かれていた。インドシナに展開する四つの師団のうち三つがトンキンに駐屯していたことになる。また砲兵連隊の内訳をみると、コーチシナの第五砲兵連隊は四つの砲兵隊で構成されていたが、トンキンの第四砲兵連隊は十隊からなっていた。明らかに陸軍の配置はトンキンに比重が置かれていた。これは以下のような理由によるものだった。

トンキンの保護領化は一八八三年に始まるトンキン攻略から始まった。ベトナムの阮朝はこれに対して清国政府や劉永福率いる黒旗軍に救援を求めたため、トンキン内で本格的な戦闘が始まった。このトンキンでの戦闘によってフランスと清は戦争へと突入した。清仏戦争は一八八五年六月の天津条約によって清がトンキン、アンナンにおけるフランスの宗主権を認めることで終わった。一方、ベトナム国内では一八八五年にハムギ帝（咸宜帝／Ham Nghi）がフランスに対する武装蜂起を呼び掛けた勅皇の詔を發布すると、トンキンやアンナンの各地で反乱が勃発した。これらの反乱は一八九五年までにほとんどフランス軍に鎮圧されるが、トンキンのバックザン省イエンテーで反乱を主導していたホアン・ホア・タム（Hoàng Hoa Thám : Dê Thám / 提探 / デ・タムとも呼ばれる）は、山岳地帯の黒旗軍残党などと連携してフランス軍と対峙し続けた。^{二三}

こうした中、一八九一年にインドシナ総督のドウ・ラネッサンはトンキンデルタを取り囲む山岳地帯に軍管区を設置する決定を行った。八月六日に発布された政令では「デルタを取り囲む山岳地帯は、その物理的特性により、極めてアクセスが困難であり、そこに居住する人々をデルタと同じ方法で管理するこ

とはできない。トンキンとその周辺にいる盗賊は、山岳地帯を避難場所としており、そこからデルタの村々を襲撃している。山地の人口は散在しており、その数も少なく、そこで得られる税収はデルタのように行政ニーズを満たすものではない。したがって、この地域には別途、経済効率を考慮した行政制度を構築する必要がある。この地域は外国からの侵略や、外国人盗賊に対して、デルタを防御する自然の要害となりえるため、恒久的な軍事力の維持が必要不可欠であり、その強化が必要である。今までの経験に照らして、これらを達成するには軍政が最適である。そこでトンキンの山岳地帯に軍管区を設置し、管区司令官は（インドシナ）総督の監督下に、総司令官の指揮に従い軍事活動を行い、トンキン理事長官が有する行政面での権限も行使する」と定められた。これを受けて、トンキンにはモンカイ軍管区、ランソン軍管区、イエンバイ軍管区、ソンラー軍管区が設置された。^{二三}

一八九七年、ドゥメールがインドシナ総督としてインドシナ赴任すると、ハノイ・ドンダン間の鉄道建設を円滑に進めるため、バックザン省のイエンテーで反仏武装闘争を行っていたホアン・ホア・タムと休戦協定を締結した。バックザン省はハノイ・ドンダン路線の中核部に位置していた。この協定でドゥメールはタムをイエンテー領主として認め、同地での自治権を保障した。一方、タムはトンキンにおけるフランス人の安全を侵害しない約束をした。^{二四}この協定後、ホアン・ホア・タムによるフランス人への攻撃はなくなり、ハノイ・ドンダン路線の建設は順調に進んだ。^{二五}さらにドゥメールは一八九八年にトンキンの山岳地帯に設置されていた軍管区での住民調査を軍部に命じた。^{二六}山岳地帯には黒旗軍の残党などが盗賊として潜伏し、頻繁にトンキンデルタの集落を襲撃していた。一方、山岳地帯の住民はタイ族やモン族などの少数民族だった。鉄道建設の支障となる中国系盗賊団の掃討には、こうした少数民族を植民地当

局に恭順させる必要があった。そのために、ドゥメールは軍管区での住民調査を実施したのである。

ホアン・ホア・タムとの休戦後、フランス軍は残存する武装集団を「海賊(Bandes pirates)」として掃討していった。一九〇〇年にはイエンバイやバックン、トゥエンクアンが軍管区から分離され、民政部門に属する省として独立した。^{一七}一九〇一年には隣国の中国で生じた義和団事件の余波から、中国人武装集団がトンキンの山岳地帯(カオバン地方)に流入したが、フランス軍はこれも「海賊」として掃討作戦を展開した。^{一八}こうした軍事作戦に進展にともない、軍管区も再編されていった。

一九〇七年のトンキンにおける主力部隊は第一師団と第四砲兵連隊だった。第一師団はハノイを拠点とする第一旅団とバックンを拠点とする第二旅団からなっていた。また、当時の山岳地帯はカオバン軍管区、ハザン軍管区、ラオカイ軍管区の三軍管区からなっていた。このうちカオバン軍管区は隣接するランソン省と共に第三軍管区師団の管轄にあり、ハザン軍管区とラオカイ軍管区は第四軍管区師団の管理下にあった。より詳細に軍管区師団の部隊編成をみると、第三軍管区師団は主に外国人部隊と第二旅団の部隊で編成されていた。一方、第四軍管区師団の部隊は外国人部隊と第一旅団の部隊、さらに第二旅団の部隊からなっていた。この第二旅団の部隊は第二トンキン狙撃兵連隊第五大隊で、ハザン軍管区のパオラック(現在のカオバン省パオラック県)に駐屯していた。これらの軍管区はハノイーランソン鉄道路線とハノイーラオカイ鉄道路線の間に広がる中国国境線の山岳地帯に設置されていた。そして、バックニン省に駐留する第二旅団はハノイーランソン路線のランソンを起点に部隊をカオバン、ハザン東部に展開し、ハノイを拠点とする

第一旅団はハノイーラオカイ路線のラオカイを起点としてハザン方面へと部隊を展開していた。

日本人娼館のあったダップカウは第二旅団の司令部が置かれたバックニンから四キロメートルほど北東に進んだカウ川沿いの小さな町だった。この町にはハノイーランソン路線の駅が置かれ、軍事物資の輸送拠点として軍務課が置かれていた。鉄道を使えば、北部の国境地帯まで物資や人員を鉄道で移動させることができた。また、ダップカウを流れるカウ川は下流に進むとハイフォンに至り、上流に進むとタイグエンに通じる。このタイグエンには第二旅団の第三トンキン狙撃兵連隊第三大隊が駐屯していた。ダップカウはハイフォンからタイグエンを結ぶ東西河川航路と、ハノイからランソンを結ぶ南北鉄道路が交わる物資輸送の結節点だったのである。さらに、カウ川を臨むダップカウの丘からは、対岸のバックザン省まで見渡すことができた。この丘には第五砲兵隊と



図8 ダップカウの丘に建つホテル(2018年筆者撮影)
現在、ダップカウの丘には中国資本のホテルが建っている。ホテルの入り口には大砲のレプリカが置かれている。ここには第4砲兵連隊の第5砲兵隊と第6砲兵隊が駐屯していた。



図9 ダップカウの丘からの眺め(2018年筆者撮影)
カウ川の向こう岸はバックザン省となる。

第六砲兵隊が配備され、カウ川の鉄道橋守備だけではなく、ハノイ防衛の前線という役割も与えられていた（図八、図九）。

一九〇七年、第三軍管区師団が駐屯するランソンでは国境の防衛強化が行われた。これは孫文の中国革命同盟会に参加した黄明堂がドンダンの対岸に位置する鎮南関の砲台を襲撃したためだった。この攻撃には孫文自身も参加していたが、清の広西軍が四〇〇〇人の軍勢で革命軍を包囲したため、孫文たちは国境を越えてランソンに逃亡した。ランソン省を管轄とする第三軍管区師団はバックニンの第二旅団と直ちに国境地帯に駐屯する部隊を再編し、トンキン領内に潜伏する革命軍の捜索を行わねばならなかった。^{一九}

一方、ラオカイ軍管区には第四軍管区師団が駐屯していた。ラオカイは雲南へと至る鉄道建設の拠点だったが、中国側ではたびたび鉄道建設に反対する暴動が起こった。一九〇三年にはハノイに潜伏していた孫文の扇動で鉄道建設運動が雲南で起こった。^{三〇} また、一九〇八年には鎮南関での武装蜂起に失敗した中国革命同盟会の黄明堂が胡漢民らとラオカイの対岸にある中国領の河口砲台を占拠して蒙自に進軍するという事件（河口事件）が起こった。^{三二} ラオカイ軍管区では急遽、ハノイに駐屯していた第一トンキン狙撃兵連隊の四中隊を派遣して国境警備を強化した。^{三三} 一方、中国領内では清国軍が革命軍を攻撃したため、黄は六〇〇名の部下を率いてトンキン領内に退却した。革命軍はラオカイ軍管区で武装解除され、黄はシンガポールに追放された。

娼館で働く日本人女性たちは、こうした紛争の最前線にいた。ダップカウやラオカイに駐留していた軍人やその関係者の人口は不明であるが、第二旅団司令部が置かれたバックニンや、軍事物資の輸送拠点となったダップカウではかなりの数に上ったと思われる。それを示すのが当時、トンキンで販売されていた絵葉書である。筆者が所有するダップカウの絵葉書は三種類でいずれも軍人

もしくは軍関係者が差出人となっている。図十は一九〇九年二月二日にバックニンの第三大隊第二中隊の友人に宛てたものだった。図十一はフランス宛になっており、消印は一九〇七年五月だった。図十二は一九〇七年七月十二日にハノイの第九植民地歩兵連隊の友人宛に送られていた。また、これ以外にも、日本人娼館のあったバックニン、ランソン、イエンプイ、フーラントゥオン、ラオカイにも同じ地名シリーズの絵葉書が存在する。図十三（バックニン）の消印は一九〇六年十月三日、図十四（ランソン）の消印は一九〇八年十一月二日、図十五（イエンプイ）の通信欄には手書きで一九〇六年十月二日とある。さらに未使用の図十六のフーラントゥオンや図十七のラオカイの絵葉書には図七の日本人女性の写真が使用されている。これは、地名シリーズと図七の版元が同じパシニャ（M. Passignat）だったからである（版元がパシニャではなかったのは図十二だけで、これはジュールフィス（P. Dieudonné）が版元となっていた）。パシニャの地名シリーズの絵葉書は、それぞれの地名が明記された場所に駐留している・いた兵士に向けたものだった。このことから、日本人娼館がトンキンの軍事拠点として一定数の兵士が駐留する場所にあつたことがわかる。

第四章 まとめ：トンキンにおける娼館の社会的配置

本論では一九〇七年にトンキン理事長官府が発令した第九号機密書簡をもとに、一九〇〇年代の日本人娼館について考察した。ここで今まで論じてきたことを整理しておきたい。第九号機密書簡はフランスと日本の外交交渉が進められる中でトンキンに在住する日本人を調査する目的をもっていた。この調査は一九〇六年に反仏運動家のベトナム人が日本に潜伏しているという情報がインドシナ当局に伝わったことで行われることになった。トンキン理事長官府が各

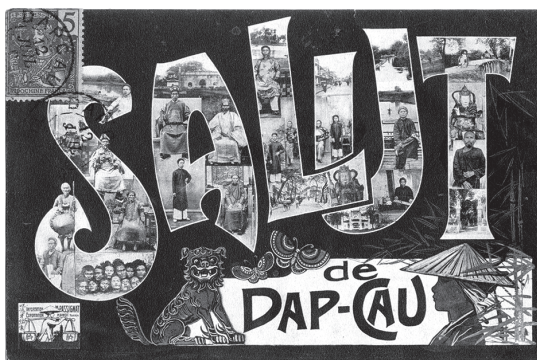


図 10 ダップカウの絵葉書(1909年2月21日消印)
版元はパシニャ (M. Passignat)

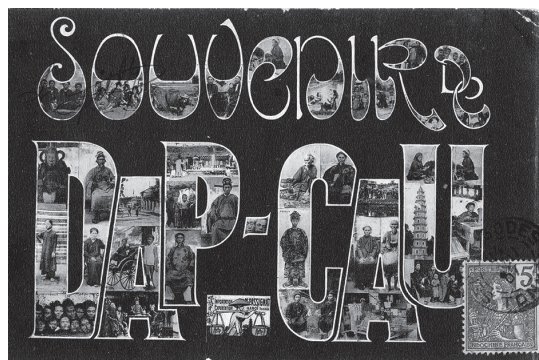


図 11 ダップカウの絵葉書 (1907年5月消印)
版元はパシニャ (M. Passignat)



図 12 ダップカウの絵葉書(1907年7月12日消印)
版元はジュールフィス (P. Dieulefils)



図 13 バックニンの絵葉書(1906年10月3日消印)
版元はパシニャ (M. Passignat)



図 14 ランソンの絵葉書(1908年11月21日消印)
版元はパシニャ (M. Passignat)

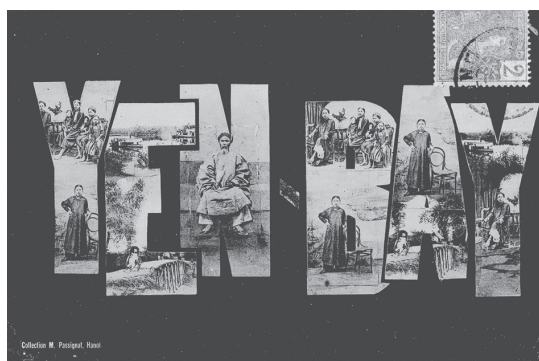


図 15 イェンバイの絵葉書(通信欄に1906年12月
2日と明記) 版元はパシニャ (M. Passignat)



図 16 フーラントウオンの絵葉書(未使用) Lの部分
に日本人女性の写真(図7)が使われている。版元はパシニャ (M. Passignat)



図 17 ラオカイの絵葉書(未使用) Yの部分に日本
人女性の写真(図7)が使われている。版元
はパシニャ (M. Passignat)

地の行政機関に依頼したのは日本人の調査であり、娼館で働く人々を主題としていたわけではなかった。しかし、結果的に娼館関連の情報が最も多くなった。これは当時、トンキンに居住していた日本人の多くがこうした職種に従事する人々だったことを示唆している。

史料をみる限り、日本人娼館は一九〇〇年前後からトンキンで営業を行っていた。この時期のトンキンはポール・ドゥメル総督による開発が急ピッチで進められていた。ハノイの都市開発はサイゴンから首都機能の移転させるためだったが、ドゥメルはこの事業を促進させる目的で一九〇二年にハノイ博覧会を開催することにした。一九〇〇年前後のハノイは大規模な建設がそこかしこで行われ、大量の労働者が働いていた。こうした中、ハノイのキューイブ通りやタース通りで日本人娼館が営まれた。

一八九九年からはドゥメルの鉄道建設事業が本格的に開始された。ハノイからバックニン、バックザン、ランソンを経て中国国境のドンダンに至るハノイ・ドンダン路線は一九〇二年に完成し、港湾都市のハイフォンからハノイまでの路線も一九〇二年には完成した。一九〇一年からはハノイから中国の雲南にいたる路線の工事が始まり、一九〇四年にはイエンバイ、一九〇六年には中国国境のラオカイまで路線が開通した。こうした鉄道路線の開通に伴って、日本人娼館は地方に広がっていった。一九〇七年ごろには、ハノイ・ドンダン路線のバックニン、ダップカウ、フーラントゥオン、ランソンで日本人娼館が営業し、ハイフォン―ハノイ路線のハイフォン（キエンアン）、ハノイ―ラオカイ路線のイエンバイやラオカイにも娼館が作られた。

日本人娼館が置かれた鉄道路線上の地方の町は、トンキンに駐留しているフランス軍の拠点でもあった。ハイフォンには海軍の基地があり、ハノイには第一師団旗下の第一旅団が配置されていた。ハノイ・ドンダン路線上にあつた

バックニン、ダップカウ、フーラントゥオンには第二旅団の各部隊が駐留し、ランソンには第三軍管区師団の部隊が展開していた。また、ハノイ―ラオカイ路線上のイエンバイは第一旅団の部隊、ラオカイには第四軍管区師団が駐屯していた。これらの部隊はトンキンの山岳地帯の防衛を担う、インドシナ軍の中核的存在だった。

トンキンの日本人娼館で働く女性で居住申告書から氏名などが判明したのは二三名だった。このうち、出生地が分かる女性は十五名となった。この十五名の女性たちはみな九州出身だった。天草出身のオサヨ（表二―三番）、オセイ（五番）、シゲノ（十五番）、オテイ（十六番）、オチク（十七番）は天草から熊本を経てラオカイにきていた。島原出身のオチヨノ（二番）、オチワ（四番）、オカマ（九番）は長崎からラオカイに入っていた。表三のハイフォン出入国記録で明らかのように、娼館で働く女性たちは香港から船に乗ってハイフォンに入港していた。このことは当時、香港―ハイフォン間の航路を使用して日本人女性をトンキンに送るネットワークが存在していたことを示している。おそらく天草や島原の女性たちも長崎や熊本から香港に入り、同様のルートでハイフォンに入港したのだろう。

ハイフォンに入港した日本人女性は、娼館の主人や手配人に伴われて入国する場合もあれば、女性たちだけで入国する場合もあった。後者の場合、ハイフォンで娼館の主人や手配人と合流し、彼らに伴われてトンキン各地に赴いた。この移動には鉄道が利用された。また当時、トンキンの日本人娼館で働く女性を顧客とするキンザブロー（史料四）のような商人もいた。こうした商人もまた鉄道を利用して行商を行っていた。娼館で働く女性たちもトンキン内部で移動していた。例えばキエンアン省（現ハイフォン）の娼館で働く三名の女性はハノイの娼館から移っていた（史料六）。また、ラオカイで働くオハナ

(表二一六番)はハイフォンからラオカイに移転し、イエンバイで働くオキワ(二二番)やオハロ(二三番)はどこから移転したのかは不明なもの、トンキンのいずれかの場所からイエンバイに移っていた。このような移動も鉄道を利用していただと思われ。

海外航路の寄港地であったハイフォン、大規模な都市開発が行われていたハノイ、中国の広西省や雲南省に接続するための鉄道建設、山岳地帯における軍事活動がトンキンにおける日本人娼館を成立させた。日本を出国した女性たちは、香港を経由してハイフォンに着き、建設されたばかりの鉄道に乗って各地の娼館へと移動した。そこはハノイやハイフォンといった都市ばかりではなく、山岳地帯という開発と紛争の最前線でもあった。彼女たちがこうした場所でのような生活を営んでいたのか史料から窺い知ることはできない。だが、一九〇〇年代にトンキンで発行された日本人女性の絵葉書を見れば、彼女たちがトンキン社会の中で性的な消費の対象と位置付けられていたことは明らかだ。彼女たちは、その身体だけではなく、イメージとしても性的に消費されたのである。

後記

二〇一八年の夏、私は妻と共に私費で天草に向いた。本渡で宿をとり、カメラを片手に風景写真を撮りながらレンタカーで下島をめぐり、フェリーに乗って島原にも足を運んだ。妻が天草だったなら住んでみたい、というほどそこは魅力的な場所だった。私が天草を訪問しようと思ったのは、けっしてからゆきさんの調査をするためではなかった。百年以上前にラオカイの娼館で働いていた女性たちの故郷に自分の足で立ってみたいと思っただけだった。

本渡を散歩しているとき、天草市立本渡歴史民俗資料館という看板をみつけ

た。せっかく天草に来たのだし、資料館は観ておかなければならぬだろうと立ち寄ることにした。展示品をいろいろと鑑賞して、ふと、からゆきさんに関するものがないことに気づいた。そこで、資料館の受付で「からゆきさんの資料はここにはないのですか」と尋ねてみたところ、すぐに学芸員の方が出てきて対応してくださった。そして、資料館にはからゆきさんに関するまとまった資料がないことを教えてくださった。その後は天草の食べ物や美味いなど、よもやま話をしたのだが、そのときふと「本渡でどこに宿泊されているのですか」と尋ねられた。私が旅館の名前を伝えると、学芸員の方は笑顔になり、「その旅館のおかみさんの大久保さんは、天草でからゆきさんのことを調べておられる有名な方ですよ。大久保さんにお話しを聞かれるのが一番ですよ」と助言してくださった。調査を目的として天草に来たわけでもなく、ふと立ち寄った資料館、なにげなくネットで予約した旅館がラオカイの日本人女性たちとつながったことに驚くと同時に、なにか運命的なものを感じた。

さつそく、宿に帰ってお話を伺えないか尋ねたところ、大久保さんはこころよく引き受けてくださった。大久保さんのお話を聞いて、もつともショックを受けたのは山崎朋子の『サンダカン八番娼館』が出版され、それが映画化されたところからカメラをもった人々が天草を訪れ、「からゆきさん探し」をしていたという事実だった。大久保さんは私に、天草では「からゆき」という言葉が男女を問わず海外に出稼ぎに出ていた人を指していたのであって、決して性産業に従事していた女性だけを意味するのではないと教えてくださった。^{三三三}そして天草の人たちが、からゆきさんをどのように捉えていたのかを知りたいければ、あるお堂を見ればわかるとおっしゃった。

翌日、私は大久保さんから教えていただいた場所に向かって車を走らせた。そのお堂は国道沿いにひっそりと立っていた。トタンを貼り付けた壁と瓦の屋

根からなる小屋のようなお堂の前には小さな鳥居があった。鳥居を抜け、お堂に一礼した後でステンレス製の引き戸に触ると鍵はかけられていなかった。恐る恐る引き戸を開けると、お堂の中には数体の地藏と共に和服姿の女性を模った木像が祀られ、その前には青々とした櫛が供えられていた(図十八)。蓮華座の上には凛と立つ女性像をみて私は思わず息を呑んだ。そして、自分の内側にあつたモヤモヤしたものが晴れていくのを感じた。社会の底辺で苦しみ、誰からも顧みられることのなかった女性というからゆきさんのイメージが、その女性像を見たことで溶解していった。そして徐々に「救われた」という感情が湧き上がった。その救いがラオカイの女性たちに対してなのか、あるいは自分に対してなのかは分からなかった。ただその像を前にして「救われた」と思ったのである。妻と二人で女性像に手を合わせ、お堂を後にして車に乗った私は「なんか分からんけど、ほんまよかったです」と呟いた。妻は「そうやな」とだけ答えた。おそらく、この女性像との出会いがなければ本論を書くとは思わなかっただろう。

エクサンプロヴァンスの文書館でブルーの箱に入って眠っていたオサヨさん、オセイさん、シゲノさん、オテイさん、オチクさんは故郷の天草を離れ、熊本、香港、ハイフォンを経て開発と紛争の最前線だった中国国境のラオカイに赴いた。彼女たちがその後、どうなったのかは知る由もない。けれども、私



図 18 からゆきさんを模した女性像 (天草：2018年筆者撮影)

の中で彼女たちは天草の女性像と一体化している。

謝辞

本論を執筆するにあたり、天草の大久保美喜子さんには貴重なお話を聞かせて頂いた。また、大阪大学外国語学部の岡田友和氏には仏領ハノイの通り名から現在の通り名をご教授いただくと同時に、一部、フランス語の翻訳をチェックして頂いた。また、本論のもととなったフランスでの史料調査は科研番号23251004による。伏して御礼申し上げます。

注

- 1 谷川健一編、一九六八年、『女性残酷物語』、谷川健一編、一九六九年、『ドキュメント日本人五人棄民』、学芸書林。谷川健一編、一九七一年、『近代民衆の記録三一娼婦』、新人物往来社。
- 2 倉橋正直(一九八九年)『北のからゆきさん』共栄書房/倉橋正直(一九九〇年)『からゆきさんの唄』共栄書房/大場昇(二〇〇一年)『からゆきさんーおキクの生涯』明石書店/山田盟子(一九九二年)『娘子軍』哀史』光人社/山田盟子(一九九五年)『ウサギたちが渡った断魂橋ーからゆき・日本軍慰安婦の系譜』新日本出版社/金一勉(一九九七年)『遊女、からゆき、慰安婦の系譜』雄山閣出版/清水洋・平川均(一九九八年)『からゆきさんと経済進出ー世界経済の中のシンガポール・日本関係史』コモンズ/巖本新奈(二〇一五年)『からゆきさんー海外へ出稼ぎ』女性の近代』共栄書房
- 3 Warren, James, A., 2003, *Ah Ku and Kayayuki-san: Prostitution in Singapore 1870-1940*, Singapore University Press (蔡史君、早瀬晋三監訳、藤沢邦

- 子訳（二〇一五年）『阿古とからゆきさん：シンガポールの買売春 1870-1940年』法政大学出版局）
- 4 *Annuaire général de l'Indo-Chine française*（以後AGIFと記載）／*Des officiers de l'État-Major du Général de Division AUBERT, 1930, Histoire Militaire de l'Indo-Chine Française : Des Débuts A Nos Jours (Juillet 1930) Tome 2, Imprimerie d'Extreme-Orient*（以後OEMGDAと記載）
- 5 AGIF 1907 : p.331
- 6 白石昌也（一九八七年）「潘佩珠の国外退去をめぐる：在日ベトナム人東遊運動の終焉(1)」『東洋史研究』四六巻二号：三二一-四一四頁
- 7 外務省、「日仏協商」『日本外交文書』第四〇巻、第一冊／「JACAR（アジア歴史資料センター）Ref:B04013474500「日仏協約関係一件（千九百七年）（B-1-0-0/J/F1）」（外務省外交史料館）」
- 8 日仏協約は一九〇七年六月一日に締結された。また、在日ベトナム人運動家の調査は一九〇七年四月十一日にフランス大使館の要請を受けて実施された。この調査で日本はクオン・デなどの運動家が滞在している証拠は見つからなかったと報告した。しかし、一九〇八年十月にベトナムに帰国した留学生が逮捕され、東遊運動に関する情報をインドシナ当局は入手することになった（白石昌也、前掲論文（一九八七年）：三八三-三八四頁）。
- 9 *Bulletin officiel de l'Indo-Chine française 1904* : pp.277-278
- 10 この段落は主にAGIF 1907にもあつてゐる。
- 11 キュイープ通りが現在のハンマー通りであることは大阪大学の岡田友和氏よりご教授いただいた。
- 12 タース通りが現在のバス通りやハンドン通りであることは大阪大学の
- 13 岡田友和氏にご教授いただいた。
- 14 Jacques Chauvin, 1994, *Paul Doumer Le Président assassiné*, Les éditions du Pantheon: p.55. / 篠永宣孝（二〇〇八年）『フランス帝国主義と中国：第一次世界大戦前の中国におけるフランスの外交・金融・商工業』春風社：一〇頁
- 15 篠永宣孝（一九九二年）「雲南鉄道とフランス帝国主義：フランス外交文書に依拠して」、『土地制度史学』三四号四号、土地制度史学会：三七一-五〇頁 / Trang Phan T. H., 2011, *Paul Doumer: Aux Origines d'un Grand projet, le Chemin de fer Transindochinois, Histoire, économie & société* (3): pp. 115-140
- 16 Paul Thomé, 1902, Note sur L'Exposition de Hanoi en 1902, *Situation de l'Indo-Chine (1897-1901)*, Hanoi, F.H. Schneider, Imprimeur-Éditeur: pp.537-540 / Michael, G. Vann, 2004, All the World's Stage, Especially in the Colonies: L'Exposition de Hanoi, 1902-3, *Empire and Culture* : pp.181-191 / Michael, G. Vann, 2007, Building Colonial Whiteness on the Red River: Race, Power, and Urbanism in Paul Doumer's Hanoi, 1897-1902, *Historical Reflections/Réflexions Historiques* Vol.33, No2: pp.277-302
- 17 Trang Phan T. H., *op. cit.*, 2011: pp. 115-140
- 18 Doling, Tim, 2012, *The Railways and Tramway of Việt Nam*, White Lotus: pp. 12-15
- 19 武内房司（2003年）「近代雲南錫業の展開とインドシナ」『東洋文化研究』五号：一-三三頁
- 20 Doling, *op. cit.*, 2012 : p. 27
- 21 篠永宣孝、前掲論文（一九九二年）

- 21 AGIF 1907 : pp. 15-30
- 22 Davis, Bradley Camp, 2017, *Imperial Bandits: Outlaws and Rebels in the China-Vietnam Borderlands*, University of Washington Press
- 23 OEMGDA, *op. cit.*, 1930 : pp. 9-11
- 24 Davis, *op. cit.*, 2017 : p.267
- 25 OEMGDA, *op. cit.*, 1930 : p.170
- 26 Jean Michaud, 2014, French Military Ethnography in Colonial Upper Tonkin (Northern Vietnam), 1897-1904, *Journal of Vietnamese Studies* Vol. 8, No. 4, pp.1-46
- 27 OEMGDA, *op. cit.*, 1930 : p.170
- 28 OEMGDA, *op. cit.*, 1930 : p.174
- 29 OEMGDA, *op. cit.*, 1930 : p.191
- 30 篠永 前掲論文(一九九二年):三七―五〇頁
- 31 OEMGDA, *op. cit.*, 1930: pp.191-192
- 32 OEMGDA, *op. cit.*, 1930: pp.192
- 33 本論では大久保さんからうかがったお話を踏まえ、「はじめに」を除いて「からゆきさん」という言葉は使用せず、「娼館で働く日本人女性」などと記述している。